

# 教育のひろば

教育ジャーナリスト

池田知隆

## 「ひきこもり」と向き合うために

### 幼児期からの自立支援システムを

### 田中俊英さんにきく



少子化とは「弱子」化ではないか。長い間、ひきこもりの若者たちの支援活動にかかわってきた田中俊英（NPO法人「淡路プラッツ」代表）はそう語る。子ども数が少なくなるとは、それぞれの生命力が強化されるどころか、若者全般を弱体化させているというのだ。ひきこもり者の年齢が高くなるほど、その支援は難しくなる。いま、幼児や小学低学年からのひきこもり「予防」システムを真剣に考えるときにきているようだ。

### 子どもの自己決定権とは

——長い間、子どもたちの不登校からひきこもりにかかわってこられたね。少子高齢化とともに、その問題はより複雑化し、深刻化しているようですが。

◆ええ。ひきこもりでいえば、ずいぶんと高齢化し、30代、40代になってからの支援はとも手間と時間がかかります。ひきこもりは、本人も含めだれも望んでいませんし、できるだけ早めに支援しなくてはいけません。

——10数年前にお会いしたときには、不登校の子どもたちの家庭訪問教師をしていましたね。いまは、主にどんなことを。

◆私が代表をしている「淡路プラッツ」は不登校、ひきこもりを支援しているNPO法人です。1992年に民間のフリースペースとして設立され、もう20年近くになります。「少子化社会において、子ども・若者を活性化させる」ことを明確に打ち出し、実績を積んできましたので、行政からの委託事業もずいぶん多くやるようになりました。

〈同施設は、阪急京都線淡路駅から徒歩5分。木造3階建ての建物の2、3階を使ったフリースペース。不登校の子を持つ親の会の人々が発起人となって設立した。〉

——そもそもどうして不登校、ひきこもりの問題にかかわるようになったのですか。

◆高校のころから出版編集や教師の仕事に関心がありました。大学卒業後、出版社の編集者として不登校の子どもたちにかかわっているうちに、上から目線で支援するのではなく、子どもたちにつきちんと向き合いたくなったのです。出版社をやめたことなどもあって、30歳前には、一生の仕事としてそんな若者の支援にかかわろうと決めました。——ちょうど不登校が社会的に大き

くクローズアップされたころですね。

◆そのころ、ひきこもりという言葉はなく、不登校も「登校拒否」と呼ばれていました。「登校拒否は病気だ」という見方が医師や専門家の間では普通で、強制入院させられた子どももいました。

しかし、強制的な学校復帰は、子どもたちをなおさら追い込んでしまします。よりハードな神経的症状をひきこます子どもたちをみて、徐々に周囲は軟化していきます。そこで「登校拒否は病気ではない。だから病院で治療するのは逆効果だ」という考え方が親や支援者から出て、各地で「親の会」が生まれ、フリースクールの創設につながっていきます。当時の親の会は「子どもの自己決定の尊重」をスローガンに掲げ、子ども同士のミーティングを重視し、何をするにも子どもたちが中心になって決め、その中で「元氣になった」子どもたちも現れました。

### 「待つ」ことの難しさ

——田中さんは、そんな家にひきこもっている子どもたちを家庭訪問し、話し相手になろうとしたのですね。

◆そのころ、「ひきこもりも自己決

定の結果だから、彼らが自主的に変わるまで待とう」という考え方も一般的になっていきましたが、私の関わった実感からいえば、ひきこもりはいくつもの要素がからみあい、その理由を「自分で決定した」行為だとはとても言えません。まさに「気づいていたらひきこもっていた」のが実情で、ほとんどがひきこもっている自分の状態をネガティブなものとして捉えていました。自己決定してひきこもったというのは明らかに嘘です。

——ただ、田中さんは「いずれ彼らは元氣を回復して社会へと出ていく

海の恵み にがりを残した

はかた  
伯方の塩<sup>®</sup>

※伯方の塩<sup>®</sup>は、自然の風と太陽熱で蒸発結晶させたメキシコまたはオーストラリアの天日塩田塩を日本の海水で溶かして原料とし、CO<sub>2</sub>の排出を少なくしています。



はかた  
伯方塩業株式会社

〒790-0813 愛媛県松山市萱町4丁目4-9  
TEL089-911-4140(代) FAX089-923-9671  
ホームページ <http://www.hakatanosho.co.jp/>

にちがいない」とひたすら「待つ」姿勢を保たれましたね。自己決定を徹底的に尊重しようと。

◆家庭訪問したときに本人が寝ていたら起こさない、「君がしたいことをしよう」と呼びかけ「したいことがない」と言われれば、二人でボーっとしているだけ。当時はそれでいいんだと思っていたんです。でもやがて、本当にそれでいいのか、悩んでしまいました。

——しかし、いつまで「待つ」ことができるかというのは切実な問題ですね。

◆現実には、いくら「待って」も変化せず、20歳を超えてしまう子もいます。子どもの意志を尊重するという意味はわかりますが、「待つ」というかわり以外の方策はないのか、という課題がでてきました。ひきこもりの子が家庭を出てフリースペースにきても、「こもる」ようになりました。プラッツ開設から5年たったとき、その間、ずっといた人が結構いたんです。待っていたら、いずれ元気になって羽ばたいていくという理念はかなり揺らぎ始めました。

## 社会に「押し出す」試みも

——ひきこもったまま成人になっていったら、親もますます不安になりますよね。

◆いつしか学齢期の子どもはほとんどいなくなり、20代後半の人を含めた青年たちが中心になりました。5年、10年とひきこもり続けた人が、4年、5年とフリースペースで「ひきこもって」しまえば、ここから社会に出るにはより多くのエネルギーが必要になります。いつまでも「そのままいいんだよ」と保護的にかかわるのではなく、社会に「押し出す」ことが大事と思うようになりました。

——社会へ押し出すために具体的にどうしたのですか。

◆ここには、しんどいのはなんでもいや、と言って、そのしんどいことに「遊び」を入れる人もいたのです。とにかく「そろそろ一緒に遊ぼうや」と呼びかけ、刺激を与えようと思いました。自己決定というけど、自己ができあがるより以前に、他者との交流があり、その交流の中で自己決定が生まれて来るんじゃないか、と考えるようになったのです。

そこでいろんなところに旅に出かけました。沖縄、韓国、ニュージーランドにいったら、スカイダイビングしたり、カヌーしたりしました。わいわい遊んで、人間関係を深めていけば、それが社会にでていくための一つのステップになると考えていました。居心地のいい場所は、ずっといるところではない、というようになつたのです。

——いつまで遊んでもいいというというわけにもいきませんね。この在籍期限はどうなっていたのですか。

◆そのころは、24歳以下は2年くらいでもいいが、25歳以上は1年で出ましよう、としていました。長いことここに通ってくれたら、経営的には楽になるけど、それではなんのために運営しているのかわからない。1、2年の間、ここで遊んで、その後の見通しがつかないようであれば、共同生活の場（自立塾のような）を紹介する。それもしんどいからいや、というのであれば、いったん家に帰って他の支援機関を考えてほしい。そう選択を迫ったのです。そこで、家に戻る人もいれば、別の援助機関に移ったり、アルバイトをしたりして、メンバーたちはここを「卒業」し始めました。フリースペー

スの在り方をめぐって「待つ」ことから「押し出す」ことに大きくブレしました。

——いま、どのように考えて運営しているのですか。

◆第1期を「待つ」というかかわり方、第2期を社会に「押し出す」というかかわり方、とみれば、いまは第3期的な状況です。いまは、「社会に出ていきたい」という若者が少なくなり、「学校へ行っていても物足りないのでは」「おしゃべりしたい」とか、「通信制高校へ行っているので勉強を教えて欲しい」などと、実に多様な要求が生まれてきています。若者の質が変わったというか、白から黒になったのではなく、よりカラフルになり、それまで2・3色だった色がたとえば12色になったようです。12色の多様な若者が来た時に1色の援助方針ではあわない。やっぱり「一人ひとりに寄り添う」ということなのか、と思いますね。試行錯誤のはてに常識的なやり方にたどり着きました。

### 多様な「ひきこもり」の型

——ひきこもりと一言でいっても、その姿、原因や背景を考えると、実に

多様ですね。どのように整理して、考えればいいのですか。

◆不登校とひきこもりの関係をみてみると、現在のひきこもりの2〜4割は不登校体験をしています。つまり高校や大学に通ったものの、就職活動や職場で挫折を積み重ね、ひきこもりになった当事者たちとの出会いが多くなっています。ひきこもりには、精神医学や不登校や就労といった問題が渾然一体となってくっついていきますし、大きくみると、次の三つのタイプがあります。

一つめは、「精神障害」です。統合失調症やうつ病で外出できず、一日中、家にこもっている場合です。潔癖性やパニック発作なども一時的にあり、極度に強い症状があらわれている場合は、治療を優先します。

二つめは、「発達障害」があります。最近、なにかと話題になっているアスペルガー症候群や高機能自閉症、ADD（注意欠陥多動障害）、LD（学習障害）などがあります。それらは主として「社会性」「コミュニケーション」「想像性」をめぐる困難さを抱え、他人への共感が難しく、結果として友達ができにくいといわれています。

三つめは、「性格の傾向」と呼ばれるタイプで、ある種のナイーブさを持っている性格の人たちです。それは無口であったり、内向的であったり、人に対してやさしかったり、目の前の問題を回避しがちだったり、自意識が強かったりといったさまざまな要素が組み合わされているようです。就職氷河期に就職活動で挫折し、就職しても過酷な職場に耐えきれずに退職し、徐々にひきこもっている人たちの中にも多数おられます。

——「精神障害」の場合は、治療優先で対応しなくてはなりません。問題なのは「発達障害」や「性格の傾向」ですね。いま、ちょっと困った人がいれば、何でもかんでも発達障害が疑われています。

◆実際、困った子や青年は非常に多くいます。団塊の世代にもたくさん発達障害的な人はいましたが、その人たちは単に困った人・変わり者です。まされました。当時はいくらでも働き口があり、いろいろな生き方が許され、発達障害的傾向があっても、就職したり結婚したり家を購入した人はたくさんいましたし、そんな社会状況でした。いま、私の知り合いのケースワーカー

たちは、ひきこもりの7割が発達障害に該当していると指摘しています。しかし、ひきこもりの青年たちを守るため、ひきこもりというあいまいな言葉で偏見の発生を防ぐことができた面もあるようです。いまやひきこもりの問題は、単に部屋から飛び出て誰かとコミュニケーションして解決、ということでは収まらなくなってきています。つまり、対人コミュニケーションができた後、そこからどうやって社会に接続していけるのか。言い換えると、社会の中でどう働くのか、どう就労するのか、どう「稼ぐ」のか、ということが大きなテーマになってきています。

## ニート論議の中で

——いわゆる「ニート」をめぐる論議がひきこもりと重なってきましたね。

「ニート」は「Not in education, employment, or training」の略で、「仕事をしていない（求職行動もしていない）、学校に行っていない、職業訓練を受けていない、15—34歳で未婚の人たち」と定義されている。その特徴は、低学歴、家族依存（経済的）、コミュニケーション能力の低さなどを表し、ひきこもり青年たちの問題とも

関連づけられ、社会的な関心を集めている」

◆ひきこもりは、もっぱら心の問題を中心になって語られました。2004年ごろから「ニート」の言葉が広く知られるようになり、就労の問題が浮かびあがってきました。個人の心のケアから経済や社会のシステムづくりが論議されるようになり、行政のサポートもなされ、支援体制も手厚くなってきました。

——不況、貧困という大津波が押し寄せ、ワーキングプアの問題も加わってきましたね。

◆ひきこもり者は自立を願っていませんが、それには大きく分けて「経済的自立」と「親からの物理的・心理的自立」があります。ニートやひきこもりの状況からやっとの思いで非正規雇用労働者になった者もいますが、個人的に一生懸命働いても生活保護水準以下の賃金で、時にはリストラされ、そんなワーキングプアの中に置かれることは少なくありません。長びく不況で、「経済的自立」を受け入れる社会的余地は狭くなるばかりです。

——それでは親の元で「ひきこもり」ことができれば、自立して働くよりも

楽という気持ちもでてきますね。

◆そうですね。自立を目指すほど、現代の若者は厳しい生活にさらされる可能性があります。自立を目指して不安定な雇用形態のまま低賃金でも働き、かつ親元から離れて寮に入ったり、一人暮らしをしたりすれば、その日食べる物やその夜寝る場所の確保に苦労することになります。いまのひきこもり者の場合、将来的には不安だらけではあっても、当面はその日の「食」や「住」で苦労しない人が大半です。それを支えているのは家族、特に親です。

——つまり、ひきこもりは、家族によるセーフティネットが日本では機能してしまっています。

◆家族によるセーフティネットが当然となっている日本社会では、親から自立するために働く若者が国の経済状況により貧困に追い込まれたとしても、「家族を頼れ」と相談窓口で言われてしまいます。これでは家族から自立することが悪いことみたいですが。まるで、自立が損で、ひきこもりがラッキー、みたいな妙な社会ですね。

——「団塊の世代」の親たちに責任があるようです。高度経済成長とともに生きた団塊の世代はもっぱら子ども



たちの自主性を尊重するという名目で、「好きなことをしたら」と放任したため、団塊ジュニアの子どもたちは結局のところ、あぐらをかいてしまったともいわれています。

◆そうですね。団塊の世代もあと10年もしないうちに70歳代に入ります。それを支える団塊ジュニアも40代になります。少子高齢化社会において生命力の弱体はひきこもり者だけではありません。

### ひきこもりの予防は可能か

——ひきこもりの早期対応、自立支援にかかわってきて、もし予防するところが可能だとすれば、そのポイントはどこにあると思いますか。

◆やはり幼児から小学低学年だと思えます。科学的な根拠はありませんが、この問題について語り合った支援者のだれもが同意してくれます。幼児を抱える若い親、それらの支援

者を含め幼児にかかわる人的環境に対して目を注いでいくべきだと思います。子ども本人の生命力の強度をあげていくことです。

注意していただきたいのは、ここでいう予防という言葉は、いわゆる「母原病」を防ぐという意味で言っているのではないことです。単なる親の育て方の問題ではなく、子どもをとりまく環境すべてを再チェックして改善しようという意味です。親の育て方だけに問題を集約してしまえば、これは予防どころか、社会や環境の問題に蓋をすることになってしまいます。

——いま早期教育の関心は、英才教育のほうに移り、それとはちょっと違った方向に流れていますね。

◆家族を社会的に開放していくことが重要ではないでしょうか。家族内で英才教育をしても、生命力の強度のアップへの効果は低い。成人のひきこもり者の中にはカップめんさえ自分でつくったことがない人がいます。炊飯器や洗濯機の使い方を知らない人がほとんどです。

日常の生活を子どもどころから当たり前のように自分でできる生命力の強度があれば、他の問題でもそれ相応の

対応ができるのではないかと、思いますが。親が率先して家族を開き、社会にいる人たちと幼児、児童が接していくように考えていくべきだと思います。

——「社会力」をどう身につけるかということですね。

◆最近、「若者」という表現も「後期子ども」といったほうが感覚的にびったりくると思います。「対社会」のような理屈めいたものではなく、単に弱く幼いのです。つまり、年齢は20代や30代でも、中身は子どもなのだから、そうした子どもたちを、まずは「若者」にしてあげなくてはならない。子どもから大人へ一気に進むことは無理だし、まずは、若者になってもらう。大人になるのはそのあとのことです。この文脈で考えると、将来的には「50代若者」という人たちも珍しくない社会がくると思えます。

——豊かな社会をつくりあげ、世界の中でも最先端を走る日本の青少年の課題ですね。イタリア社会でもひきこもりの問題が深刻になっているようですが、ある意味では、日本は人類史のフロントランナーとしての課題にぶつかっているということなんじゃないかな。

◆現実にいまの勢いでひきこもりが

増加すると、年金や税収の面で社会全体がどのようなまなざしで見られるようになるのでしょうか。ひきこもり者が公的なカネの無駄遣いになっているとの批判もでかえませんか。年金を払わないひきこもり者のせいで年金行政が破たんするのは受け入れられない、というように。精神障害者は社会的弱者として認めるけれど、ひきこもりやニートは単なる「甘え」だとして社会的な非難を浴びるようになるかもしれません。

——ひきこもりがそのような社会的に排除されないためにはどうすればいいのでしょうか。

◆大阪府や国では数年前から「ニートサポート事業」や「地域若者サポートステーション事業」といった事業を実施してきました。09年度に私たちが府の委託を受けて行なった「ニートによるひきこもり支援事業」では、ニートの若者たち5人をサポーターにして10人のひきこもり者に働いてもらう活動をしています。NPOなどが工夫して予防事業を企画、立案し、そこに行政が予算をつけ、結果的にひきこもり者の数が減少するようにしていかななくてはなりません。今からでも遅くはありません。さまざまなアイデアをもち

よって、ひきこもりを世の中からなくすシステムの構築を真剣に考えるときがきています。

#### 〈略歴〉

田中俊英（たなかとしひで）

1964年香川県生まれ。龍谷大経済学部卒。出版社勤務を経て不登校やひきこもりの青少年への家庭訪問活動を始める。2000年よりひきこもりなどの支援団体「淡路プラッツ」（大阪市東淀川区）のスタッフになり、同施設がNPO法人になった02年に同代表。03年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程（臨床哲学）を修了。著書に「ひきこもり」から家族を考える」（岩波ブックレット）などがある。

#### ●NPO法人・淡路プラッツ

〒533-0021

大阪市東淀川区下新庄1-2-1

電話 06-6324-7633

問い合わせは

平日（水曜日を除く）10時～18時

土曜日11時～17時

HPアドレス

<http://www4.ocn.ne.jp/~awjplatz/>

# 教育の広場

- 「ひきこもり」と向き合うために  
 幼児期からの自立支援システムを 田中俊英さんにきく 4

# NEWS ROTARY

- 高速料金 実質値上げ 無料化公約どこへ 11
- 使いたい時に素早く必要量を浄水できる合理的な卓上型浄水器 15
- 人と環境にやさしい省エネ性能にすぐれた樹脂の窓 22
- 医療機器メーカーによる人にやさしい高さ自動上下枕 26
- 腸内環境の健康維持の重要性 30
- 新刊案内 「引き出しの中のラブレター～愛の物語」 48

2010

6

## CONTENTS

### REGULARS

- 女性ホルモンの神秘と効用 21
- 獣医師は、なぜ、動物の言葉がわかるの？—嘔吐— 35
- 医療事情のウラオモテ—臨床心臓病学教育研究会（ジェックス）の活動— 36
- たかが われらが日々？—「戦略なき生き方」へのあこがれ— 43
- あのときこんなこと 49
- なまずのひとりごと—地震と鯨（その一）— 58
- 回虫博士の世界漫遊紀行—顔から皮膚から「ばっちいもの」健康学(5)— 61
- 暮らしたいいきいき衣・食・住—米糠を暮らしに活用— 64
- 旅と宿—体験の宿—宿坊②— 68
- 奈良歴史散歩—1300年の寧楽⑤—平城京物語（下）— 72
- LIBRARY 76
- 6月の運勢 79
- 編集後記 80

表紙写真 森村 進

